

「1 マレーシア」の可能性

山本博之

第 6 代首相に就任したナジブは、首相就任とともに「1 マレーシア」(1 つのマレーシア)を打ち出した。マレーシアにはさまざまな人がいるが、それぞれの違いを乗り越えて 1 つのマレーシアを作り出そう、というメッセージである。この種の政府キャンペーンによくあるキャンペーン・ソングのコンテストを含め、さまざまな関連イベントが行われている。

これまでのところ、マレーシアの国民は広く「1 マレーシア」を受け入れ、さまざまな分野で積極的に呼応しようとする態度が見られる。街角でも新聞やテレビでも「1 マレーシア」にちなんだものが溢れかえり、中にはただ「1 マレーシア」と言っているだけではないかと思えるものも見られたりするほどである。

「1 マレーシア」は、「民族の政治」が持つ 2 つの原則である「社会的に認知された枠組みであるバンサ(民族)が国政レベルで代表を派遣する資格を持つ」「バンサ内のことがらについては相互不干渉を守る」を緩和しようとしたものだと見ることができよう。直接的に言えば、「バンサでないものを含めてマレーシアに居住するすべての民族を対等に扱う」「バンサ内で問題が解決できない場合は他のバンサが手を差し伸べる」という 2 つの原則の導入ということになる。

*

マレーシアの前身であるマラヤ連邦で発展した「民族の政治」とは、国内の文化的に多種多様な人々をマレー人、華人、インド人という 3 つのバンサに大まかに分類して、相互に不干渉の原則のもとでバンサごとに相互扶助を行うという仕

組みだと言うことができる。

バンサどうしの相互不干渉の原則とは、民族が異なる人どうしのトラブルを当事者どうしで直接解決させないということである。トラブルの原因を文化の違いとして語ると際限のない争いにエスカレートしてしまうため、それを防ぐ知恵だということもできよう。

その一方で、マレー人、華人、インド人という 3 つのバンサに「公認民族」として特別な地位を与える仕組みでは、この 3 つのバンサと異なる人々には十分な扱いが得られないという問題がある。サバの人々が 1980 年代に「サバ人のサバ」を唱えたのはバンサの地位を得ようとしたものであると理解できる。

また、各バンサ内部の問題は相互不干渉なので、あるバンサの指導者がそのバンサの発展にとって望ましくないと思われても他のバンサからは介入できず、そのためそのバンサに属する人々が自分たちは国から見捨てられていると思うことにもなりかねない。

これらの問題は、「社会的に認知された枠組みであるバンサが国政レベルで代表を派遣する資格を持つ」「バンサ内のことがらについては相互不干渉を守る」という仕組みを取る限り、避けることができない。マレー人から見れば、他バンサのことはそのバンサ内で解決すべきことで、その指導者が誰になろうと自分たちは口出しすべきでないということになる。ただし、そのためにそのバンサ内の不満が高まると、その不満は国家やマレー人にも向かい、国家全体が不安定になる可能性がある。このことに気付き、他バンサに介

入ることによってこの問題を解消しようとする試みが「1 マレーシア」であると言えるだろう。以下では「1 マレーシア」の 2 つの原則について検討したい。

*

「バンサでなくてもマレーシアに居住するすべての民族を対等に扱う」という原則は、バンサの地位が得られないために社会の主流から外れていたと感じていた人々にとって朗報となった。このことは特にサバで顕著に見られる。

1980 年代にサバ州が「サバ人のサバ」を掲げて要求していたものいくつかが今年になって認められた。サバとサラワクが結成に加わってマレーシアが成立した 1963 年 9 月 16 日を記念して 9 月 16 日を国民の祝日にするという要求や、サバ州の地元の祭りである毎年 5 月末の収穫祭を連邦全体の祝日とするという要求が認められた。

サバの人々も「1 マレーシア」に積極的に応答している。今年に入り、州内のイベントで民族横断的な踊りが披露される機会が増えている。カダザン人とバジャウ人の民族衣装を着た人が同じ舞台上で隣どうし並んで踊っている様子は、これまでのサバで見ることがなかったものである。「1 マレーシア」を歓迎して「1 サバ」で答えようとしているサバの様子を見て取ることができる。

その一方で、「国内のすべての民族に官職を」という発言が独り歩きした結果として、サバではカダザンドゥスン人の中でさまざまな自称を唱えるグループが現れている。カダザンドゥスン人が二分される事態になることはあまり考えにくい、いずれにしろ、「カダザン(ドゥスン)人であること」と「マレーシア社会に自分がどう位置づけられるか」の関係が問われているということである。

「バンサ間の相互不干渉」という原則に関しては、マレー人である国家指導者が華人社会やインド人社会の問題解決のために直接手を出す可能性が生じている。開発プロジェクトを与えるような介入にとどまるのか、政党の役員人事に介入することなどまで想定されているのかはわからないが、このことは、マレー人指導者にとって管轄する範囲が増えたということに加え、バンサ間のバランスを崩しかねないという危惧もある。

マレー人、華人、インド人と分けることで民族の独自性を維持しながら 1 つの国家を作り上げてきたこれまでのあり方と異なり、マレー人が国全体に対して責任を負う仕組に変わっていくかもしれない。その場合、政治経済面ではマレー人が国全体を導き、華人やインド人は文化面での枠組として残る可能性が考えられる。

これがよいか悪いかは当事者が判断すべきことだが、いずれにしろ、長期的には、マレーシアの複数の民族間の違いを文化的な違いだけに止めて、政治経済的には違いを意識しないで済むような社会を作り、そこでマレー人や他の先住民族が中心的な役割を担えるようにするという方向が念頭に置かれているように見える。

その意味では、「1 マレーシア」は「バンサ・マレーシア」などのこれまでのスローガンと究極的な目標は変わらないのかもしれない。ただし、「バンサ・マレーシア」がマレーシア国民に限定されているのに対し、「1 マレーシア」は国民であるかないかを問わずにマレーシアという場を共有するすべての人に開かれたものとなる可能性を秘めている点が異なっている。ここにマレーシアが向かおうとしている新たな方向性とその可能性が垣間見えるような気がする。